

# MURAMATSU通信 SPECIAL

保存版

金製ムラマツ・フルート

14K.GOLD/18K.GOLD

ゴールドを代表する2つの魅力

## 01 笛吹きとの対話

アンドレ・ジョネ

●青木 宏

03 **特集** 金製ムラマツ・フルート  
14K.GOLD/18K.GOLD

## 11 音楽史の扉

J-M.ルクレール

●森岡広志

## 13 ムラマツ・フルート ラインナップ

輝きに、願いをこめて。

古くて新しい伝統工芸、きりかね截金。

純金箔やプラチナ箔を線状や丸・三角・四角などには切り  
膠を使い筆で貼りながら、種々な文様を描きます。

六世紀、仏教と共に仏像装飾の技法として大陸より伝わり、  
十一世紀末より日本独自の截金として発達し、

十三世紀に至るまで、優麗な仏教美術の華を咲かせました。

その後截金は衰退しますが、少数の截金師により伝承されました。

現代では、茶道具や室内装飾、調度品などにも応用されて復活し、

繊細で洗練された輝きを放っています。

それは単なる技の伝承だけではなく、古の先達たちの截金への  
真摯な精神をも遺伝子のように受け継いできたから。

ムラマツ・フルートのすべてにも、

日本で初めてフルートを完成させた情熱と愛情と技という  
遺伝子が、すみずみまで受け継がれています。

——フルートが素敵なものになるために。





## 笛吹きとの対話 ― 3

# アンドレ・ジョネ フレンチ・スクール 最後の名人

村松フルート製作所◎ 青木 宏

「ドの音を四つ吹いてください」  
アンドレ・ジョネさんは生粋のフランス人で、尊敬するマルセル・モイーズに早くから学び、パリ音楽院ではフィリップ・ゴーパールやモイーズのクラスで研鑽を積んで、フレンチ・スクールのしつかりと身につけた人です。

そのジョネさんが、スイスのドイツ語圏のチューリヒに定住するようになったのは、1934年、指揮者のヘルマン・シエルヘンからヴィンタートゥーア市立管弦楽団に誘われたことがきっかけでした。ジョネさんは、50曲くらいの曲を準備してカバンに入れ、シエルヘンに会いに行ったのです。ところが、シエルヘンは「ドの音を四つの高さで吹いてください」と言うだけ。ジョネさんが曲を用意してきたことを言うと、「音楽は私が十分わかっています。あなたは音さえきちんと出してもらえば」。それでジョネさんは、すっかりアタマにきちゃった(笑)。

アンドレ・ジョネ (André Jaunet)  
(1911年5月17日、アンジェ [フランス] ~  
1988年12月13日、チューリヒ [スイス])

フィリップ・ゴーパールとマルセル・モイーズにフルートを学び、フレンチ・スクールの最後の継承者と称される。  
1939年、ジュネーヴ・コンクールでマルタンの「バラード」を初演して1位を獲得。1938年から1976年までスイスのチューリヒ・トーンハレ管弦楽団の首席フルート奏者をつとめる。  
R.エイトケン、D.フルーリー、J.-C.ジェラルド、P.-L.グラーフ、P.マイゼン、A.ニコレ、G.ルンベル、吉田雅夫 ほか、数多くのフルート奏者を育てる。

でも、ジョネさんは2年間このオーケストラの首席をつとめました。その後、ベルン交響楽団の首席を経て、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団の首席と音楽院の教授となり、オーレル・ニコレやペーター・ルーカス・グラーフなど大勢の素晴らしいフルーティストを育てたのです。

### 優れた分析力と表現力

ジョネさんは、1970年に日本フルート協会の招きで来日し、東京音楽大学でバロック音楽について講演をしたことがあります。バッハの口短調ソナタのアナリゼをしたとき、ジョネさんに教えを受けた吉田雅夫先生が、このソナタがどのような構成になっているかを一枚の紙に図式化してまとめ、参加者に配りました。ジョネさんの要望だったのです。

このように、曲を深く分析して咀嚼し、自分のものにしてから演奏するのがジョネさんの特色です。作品に対する非常に優れた構築力を持ち、思いつきで物事を進めることは一切しません。

ジョネさんによると、転調する際に、一番大きな意味を持つのは半音での移行だといいます。例えばドビュッシーの「シランクス」で Rubato と記されている箇所では、半音で転調しています。そこではルバートをすると同時に、音色も微妙に柔らかく変化させ、全体の流れを緊張から弛緩へと導くのです。



ジョネとマルセル・モイーズ (右)。  
中央は指揮者のシャルル・デュトワ。  
1965年、ボスヴィル。

いろいろですが、一番わかりやすく射ているのがジョネさんのものだと思います。

「ソノリテ」――音の響き。それを磨くためにどうしたらよいか。そのための身体づくり方から始めて、音程のとり方など、音のつくり方を詳細に示したものです。これを演奏者が理解すれば、音楽表現のいろいろな可能性を見つけることができます。

一例を挙げると、モイーズは「シ」から「シb」へ、「シb」から「ラ」への移行によって、半音の練習を展開していきます。ここをジョネさんは「シ」から「ラ#」に移行し、そして「シb」から「ラ」に移行せよ、とされています。鍵盤楽器では異名同音ですが、実際の音楽では「シb」より「ラ#」のほうがピッチが高い。このように半音を見直して考えると、この練習は音を音楽的に発展させることができるのです。

### 「退屈な演奏だけはないこと!」

吉田雅夫先生もジョネさんにたいへん心酔していました。吉田先生がドビュ

「私が亡くなったら、フレンチ・スクールはおしまいだ」と、口癖のようにおっしゃっていましたが、ジョネさんのフレンチ・スクールとは、伝統的なフレンチ・スクールをさらに発展させ、深めたものなのです。フランス人のフルーティストは、直観力を働かせて演奏しますが、ドイツ人は頭でつかちの傾向があります。ジョネさんは最終的には、フランス人の持つている直観力、ものを嗅ぎ分ける能力にプラスして、ドイツ人が育んできた論理性もミックスした演奏、音楽をつくりあげたのです。

### スイスの大きな岩

こうしてジョネさんの音楽が熟していく過程には、スイスに生まれ、ベルリン・フィルで活躍したオーレル・ニコレさんの存在も大きいと思います。ニコレさんはジョネさんに師事しましたが、先生のほうも弟子から学ぶことがたいへん多かったのだと思います。こうした師弟関係はとても素晴らしいですね。

ベルリン・フィルの首席のハンス・ペーター・シュミッツが1950年にリタイアするとき、指揮者のフルトヴェングラーが

『ソノリテ』の練習法  
さらにジョネさんには、モイーズのエチュード『ソノリテについて』の練習法をまとめたものも残っています。『ソノリテ』は実にシンプルな訓練ですがたいへん難しく、その練習法も演奏者によっていろ

また、ドビュッシーはこの音楽にはこういう和声を考えていたのだろうと、フルート独奏に和声譜をつけました。こうすると、和音の進行や移行がよくわかります。このように徹底的に曲を分析し、音楽の流れを解き明かすのが、ジョネさんの真骨頂ですね。

ジョネさんはひとつひとつの音が持っている性格、その音が緊張しているのか弛緩しているのか、どんな音色を要求しているか、そうしたことを譜面を見ながら的確に表現できる。音色に関してもとても敏感で、いろいろなニュアンスを大切にします。それは音楽にファンタジーを吹き込み、生き生きとさせます。そうしたジョネさんの特色が見事に生かされた演奏例が、幸運にも録音の残っているペルグレージのコンチェルトですね(ムラマツ製作のCD『アンドレ・ジョネ偉大なフルーティストの芸術』に収録)。

### 新しいフレンチ・スクールをつくりだす

スイスに渡ったジョネさんは、ドイツ語をはじめその地の文化を学んでよく理解し、またヨアヒム・クヴァンツやレオポルト・モーツァルトの奏法の研究をはじめ、ドイツ人が培ってきた音楽の伝統を積極的に取り入れて研鑽を積んだのです。そうしてまったく新しいアプローチの仕方や奏法を、自分で発見していきました。

ツシーの「シランクス」のレッスンを受けたとき、ジョネさんは、「お前は日本人なのだから、日本人らしく演奏してみろ」と言われました。で、先生は竜笛をイメージして吹かれたそうです。するとジョネさんは、「それだ!」――ファンタジーなのです。もちろんイメージの違う場合は修正が必要ですが、何よりも音楽にはファンタジーが大切なのです。頭で考えるだけではない。これもモイーズから受け継がれている音楽の粋です。

ジョネさんはモイーズから言われた「自分の思うとおりに演奏しなさい。しかし退屈な演奏だけは絶対にしないこと!」という言葉を大切にし、それを守った演奏家だと思います。

1984年にジョネさんが来日されたときは、吉田先生をはじめ、お弟子さんたちが歓迎パーティーをムラマツの新店のホールで開きました。宴たけなわとなり、みなで笛の合奏を始めたとき、やおらジョネさんがカバンから譜面を取り出して配ったのです。それは「ハッピー・バースデイ・トゥ・ユー」を、ジョネさんがフルート合奏用にアレンジした変奏曲でした。その日、私どもの同僚のひとり誕生日なのを、ご存じだったのです。

レッスンも厳しく、非常に辛らつな批評もしますが、こうしたとてもやさしい心配りを持った人で、みんな音楽を楽しみ、仲間をととても大事にされていました。



ジョネとオーレル・ニコレ(左)。  
中央は娘のイヴォンヌ。



今回はゴールド・フルートを代表する  
14Kと18Kのモデルについて、  
埼玉県所沢市の村松フルート製作所に  
詳しい話を聞いた。

## 素材としての金の特性

ムラマツ・フルートは、洋銀、銀、金（9K、  
14K、18K、24K）、プラチナの7種類の素  
材でつくられる。その中でゴールド・モデ  
ルはどのような特性を持つのだろうか。

「金属の比重を比べると、一番小さいのが  
洋銀。次に銀、そして、9K、14K、18K、24K、  
プラチナの順番となります。比重とは同じ  
体積にしたときの密度の比で、比重が大き  
いほど密度が高い（＝重い）ことになります。  
同じ管厚の場合、素材の比重が大きくな  
ると重量も重くなりますから、音色や吹き  
心地が変わってきます。この比重による音  
色の違いは感覚的にわかるもので、比重の  
小さいほうが軽くて抵抗感が少なく、大き  
くなるにつれて重く抵抗感が増え、深みが  
出てきます。比重のほかにも、金属としての  
音色の違いがあり、銀製に比べると金製は  
輝かしく華やかに感じられます。

素材が変わると、フルートを製作するこ  
とも違いが出てきます。例えばトーンホ  
ールの引き上げ工程に代表される、金属を  
曲げたり伸ばしたりする加工は、金は銀よ  
り硬度が高いために加工の難度も高くな  
ります。」

## ゴールド・モデル 14K.GOLD

理想の配合バランス。究極の信頼性。  
ザ・ゴールド・オブ・ゴールド。

## 18K.GOLD

すべては、表現のために。  
独特の抵抗感と想像を超える可能性を内包する、  
18Kゴールド。





## 時代が求めたゴールドの音色

なぜ金製のフルートが好まれるようになってきたのだろうか。

「古くから管楽器の製作者たちは、様々な材質とその加工技術を研究してきました。種類の異なる木や象牙、陶器、クリスタル、そして金属が使われるようになってからも真鍮や洋銀などの合金から銀まで。それらは管楽器の種類によって合うものも合わないものもあり、時とともに淘汰されてきたのです。そして金という材質がフルートに向いているということは、製作者、演奏者から聴衆までもが認めた結論のひとつだと思います。」

そして、大きな劇場やコンサート・ホールでの演奏会が増えたことも、理由のひとつに挙げられるでしょう。広い会場の隅々まで通る音、立ち上がりの良さや音色のクリアネス、そして、力強い低音域は、ゴールド・フルートの大きな特徴です。

新しい楽器が生まれると、そこからインスピレーションを得た楽曲や、その特性を活かした作品が誕生します。新しい音楽と新しい楽器は相互に結びつき、影響を与え合うのだと思います。

1869年に製作されたルイ・ロットのゴールド・モデルは、ゴールド・フルートがいつから

つくられたかを知る上で、残された数少ない記録のひとつです。

この楽器はジャン・ピエール・ランパル氏が所有していました。ランパル氏、ゴールウェイ氏など、現代のヴィルトウオーズと言われたスーパー・ソリスト達が好んで愛用したことは、ゴールド・フルートが注目を集める最大の要因といっても過言ではありません。」

## 18Kの新しい音

ムラマツでは1979年に初めて製作された18Kモデルだが、ラインナップとしての登場は1998年以降のカタログに掲載されている。

「14Kと18Kを比較して吹いていただいた時に、お客様から次のようなコメントをいただいたことがあります。『反応が良く、ややエッジの立った感じのする14Kに対して、18Kは、まろやかさ、柔らかさ、表現の幅の広がりを感じられる』と。これは金の含有量によって生じる14Kと18Kの音色の差ということになります。14Kとは違うゴールド・モデルの新しい選択肢として、18Kが好まれるケースは増えてきました。決して14Kの上位が18Kということではありません。同じゴールドでも14Kと18Kのキャラクターで選んでいただけるようになったわけです。」



## スタンダードな14K

ムラマツでは14Kモデルの製作を昭和41年（1966年）にスタートした。当時ゴールド・フルートといえば一般的に14Kモデルを指し、現在も14Kがゴールド・モデルの標準となっている。

「14Kは58%の金に銀と銅を混合した金属です。一方、18Kでは金が75%となります。銀と銅の混合率は一定ではありませんが、銅が多ければ赤味を帯び、銀が多ければ白味を帯びた色になります。この金属の配合バランスが加工性や音の違いに影響します。」

宝飾アクセサリなどでは14Kよりも18Kのほうが主流ですが、フルートに使われる金の場合には、音色、重さ、吹き心地など、楽器としてのさまざまな適合性・バランスから、14Kのほうが標準になっています。現在、プロの演奏家が吹いているゴールド・モデルは14Kが多いこともあって、《ゴールド・フルートの音色》14Kの音色》というイメージも強いのかも知れません。

ちなみに、ゴールドの管厚は銀よりも薄く設定されています。銀と同じ管厚にするとゴールド・モデルはもっと重くなります。製作所では響きや重量などの様々な要素を考慮して、素材に適合した管厚を決めています。」



## メカニズムとトーンホールのヴァリエーションについて

「14Kと18Kのメカニズムは、銀、9K、管体との同一素材（14Kまたは18K）の3種類があります。メカニズム部分の重量は意外に重く、使用する素材によって、楽器全体の重さや操作感、そして何より音色に違いが生まれます。管体とメカニズムは、どのコンビが良いということを言い切ってしまうのは難しいことです。敢えて言うのであれば、その素材の特徴を最も引き出せるのは、管体と同一素材でつくられたメカニズムだと思います。また14Kと18Kともに、トーンホールのヴァリエーションとしてドゥローン（引き上げ）とソルダード（ハンダ付け）の2種類をご用意しています。もちろんトーンホールも音色の違いにつながる大切な要素ですので、是非、吹き比べていただきたいと思っています。」

写真上／ドゥローン・トーンホール  
写真中央／ソルダード・トーンホール  
写真下／銀製メカニズムとのコンビネーション





## 各モデルの統一感

ムラマツ・フルートの大きな特徴は、全てのモデルがハンドメイドであり、同一の精度と品質で製作されているため、全ラインナップを通じて一貫したポリシーがある。

「EXから24Kまで、ムラマツの全てのモデルを聴き比べるイベントが行われたことがあります。奏者には、リハーサルなしで、同じメロディーを様々なモデルで吹き比べていただくのですが、『どのモデルを吹いても、どう吹いたらよいかの判断は一瞬のうちについて、楽器を変えてもまったく違和感なく吹けました』と仰っていただけました。このことは、モデルの違い⇨素材の違いであり、楽器の作り方や、そのモデルが目指す方向性の違いではないことが証明されたと思っています。私たちは、お客様が素材による音色の好みによって楽器を選ぶことができる、全ラインナップの統一感こそが、ムラマツの最大の特徴と考えています。」

## ゴールド・モデルのメンテナンス

金は錆びにくいので、ついメンテナンスを怠ってしまいがち？……

「金は宝飾品に使われてきたことでもわかるように、変色しにくい特性を持っています。金の含有量が58%の14Kでも、銀に比べるとずっと耐食性があります。銀の場合は放っておくと全体が黒ずんできますが、金は見た目が変わりにくいので、逆に手入れがおろそかになっってしまう危険性があります。」

他の素材と同じように、表面を柔らかい布や皮で拭き、管内の湿気

を取り除くなど、日常の手入れはしっかり行っていたいただきたいと思っています。

メカニズムはどのモデルや素材の場合も、まったく同じ精度で作られていますので、使用頻度や扱い方によって差はありますが、耐久力に大きな違いはありません。それから、もちろん、定期的な注油と調整が必要なことは、皆さまご承知の通りです。

14Kと18K。ゴールド・モデルを代表する2つの個性をお近くの販売店で、是非お試しになってください。」

## 匠の技

最後に、その美しさと精巧さから、人気の高いオプションとなっている彫刻。ムラマツの誇る手彫りの技術について話を聞いた。



「彫刻は下絵を描くことから始まります。その下絵を、材料のリップ・プレートやキー・カップに写し、様々なデザインを彫りだしていくのですが、線の太さや形に応じて、刃先の異なる十数種類の彫刻刀を使い分けています。ミスの許されないフリーハンドの作業は、唯一無二の付加価値として、お客様のフルートをさらに特別な存在へと高めます。」





# 音楽史の扉

3

## ジャン＝マリー・ルクレール

今回は、その美しく気品のあるヴァイオリン演奏が、イタリアのコレッリとともに「天使」と讃えられたルクレールのフルート・ソナタをご紹介します。



ジャン＝マリー・ルクレール  
(1697-1764)



クレールは天使のように演奏し、ロカテッリは悪魔のように演奏した。」

この言葉はルクレールがドイツのカッセルでイタリアの有名なヴァイオリニスト、ロカテッリと競演した時の演奏を聴いた人の感想です。その演奏会は、当時の音楽界の二つの大きな流れであるフランス様式とイタリア様式を聴き比べようという興味深い試みでした。その人はルクレールのヴァイオリンの音色の美しさと自由自在にリズムを操る素晴らしさを「天使」に例えました。またこの言葉を記録したルスティヒという人も「ルクレールは尋常でないほ

どクリアで甘い音色によって、聴衆の心をとらえる術を知っていた」と述べ、ルクレールのヴァイオリン演奏を絶賛しています。ロカテッリが「悪魔のように」と形容されているのは、ルクレールとは全く異なる演奏スタイルだったということ強調した言葉のようです。驚異的な左手のテクニクを駆使した情熱的で激しい演奏が彼の特徴でした。いずれにせよ、ルクレールの気品あるフランス様式の演奏が人々の心に安らぎと感動を与えたのは間違いありません。

ルクレールは生涯にヴァイオリンと通奏低音のためのソナタを49曲作曲しました。特筆すべきは、ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ集第1巻作品1の2番ハ長調、6番ホ短調、第2巻作品2の1番ホ短調、3番ハ長調、5番ト長調、11番ロ短調と第4巻作品9の2番ホ短調、7番ト長調の8曲がルクレール自身によって、*lute* *et* *viola*（直訳するとドイツ・フルートという意味ですが、当時フランスでは横笛を意味しました）で演奏可能で

あるとされていることです。また第2巻の8番ニ長調はフルート、ヴィオラ・ダ・ガンバ、通奏低音のためのトリオ・ソナタであり、これを加えるならルクレールのフルートのためのソナタは全9曲ということになります。

ルクレールはそれらの曲がフルートで演奏出来るように、ヴァイオリン・パートを自ら書き換えたり、ある曲ではフルートとヴァイオリンのための別々の変奏を作曲することまでしています（譜例①、②）。ほかの作曲家たちが、ヴァイオリンでもリコーダーでも、フルートまたはオーボエでも演奏してよい、というような大雑把な感じで作曲しているのに対して、ルクレールは厳密にフルートのためにこれらの曲を選んだのです。そしてどのソナタにも、天使のような演奏で人々を感動させたルクレールの豊かな才能が遺憾なく発揮されています。彼の作品の特徴は、まず美しい通奏低音の動きです。それは緩やかな楽章ではしっかりとフルートを支えながら夢見るような旋律線を描き



リヨンの飾り紐の一例。  
(Lyon Manufacture Passementerie より)

室音楽家」に任命され、その後「首席奏者」になります。これは大変に名誉ある地位でした。彼はここで生涯の絶頂期を迎えます。しかしこの後、ルクレールは、まさかの転落の人生をたどっていくのです。その辺りの話も興味深いのですが、それはまた別の機会に譲りたいと思います。

彼の作品の素晴らしさは、もちろん持つて生まれた豊かな才能によるものですが、ここまでのルクレールの経歴も大きく影響していると思われます。父親から飾り紐という独特の繊細さを要求される技術を学んだことは、彼のメロディーに散りばめられたフランス様式の装飾に生かされています。ルクレールの装飾音はまさにそこになければならないという必然性が感じられるほど考え抜かれたもので、それ以上の装飾を演奏者が付け加える必要はないと言えるほど繊細で完璧です（譜例③、④）。またその生き生きとしたリズム

感あふれる通奏低音は、彼がダンサーであったことを雄弁に物語っています。そして大胆で息をのむほど美しい和声はイタリアとフランスで最高の音楽家たちから影響を受けて、彼がイタリア様式とフランス様式を見事に融合させた結果だと言えるでしょう。

ルクレールのソナタはフルーティストにとってフランス・バロックの宝のような存在です。是非みなさんもこれらの美しいソナタを「天使のように」演奏してみてはいかがでしょうか。

譜例③ 作品9の2 ホ短調の第3楽章の冒頭。



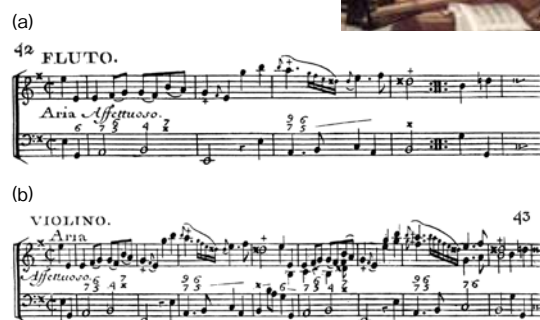
譜例④ 作品9の2 ホ短調の第3楽章の末尾。



譜例① 作品1の2 ハ長調の第4楽章の冒頭。同じ段にフルートとヴァイオリンを書き分けてある。



譜例② 作品9の7 ト長調の第3楽章の冒頭。フルート用(a)とヴァイオリン用(b)が別々のページに印刷されている。



森岡広志  
パリ・エコール・ノルマル音楽院を、演奏家資格を得て卒業。メゾン・ラフィット音楽院教授を勤めた後、帰国。ムラマツ・フルート・リッスンセンター講師。



コンセール・スピリチュエルが行われた、チュイルリー宮殿。  
1871年に焼失し、1883年に解体された。